

抑圧の回帰としてのアイロニー スティーヴン・クレイン *The Red Badge of Courage* 論

阿部幸大

0. 不十分な主体化、あるいは奇妙な成長

スティーヴン・クレイン (Stephen Crane) の *Maggie: A Girl of the Streets* (1893) をもってアメリカ自然主義文学の嚆矢とするという文学史的常識を思えば、小説空間を「実験室」のごとき閉域と見做し、そこに何らかの設定と人物を放り込んで生じる事態を冷徹に観察する——そして彼らの多くは環境に敗れて死ぬ——という自然主義文学の一般的なイメージに照らして、*The Red Badge of Courage* (1895) という戦争小説はある特異性を備えていることが明らかとなる。それは、「戦場」という人が死んでゆくことが常態であるすぐれて自然主義的な「環境」を設定しておきながら、クレインが、その主人公を殺さなかったどころか、むしろ彼に「成長物語」というプロットを与えたということである。

ここで言う「成長」とは、ごく素朴な次元の読解としての、戦場でhero的奮闘ぶりを発揮し凱旋することを夢見て北軍兵に志願した主人公ヘンリー・フレミング (Henry Fleming) が、戦場の悲惨あるいは杜撰な現実と直面して早々にその目標を断念することを余儀なくされるものの、しかし彼はやがてmanという下方修正された主体化を達成し、かつ戦場でなかなかの活躍をみせる——というプロットを指している¹。ヘンリーが語り手によっておおむね固有名ではなくthe youthと名指されるという特徴も、彼が戦場で「大人」になるというイニシエーション的側面を裏付けている。じっさい、従来の*Red Badge*批評は必ずと言っていいほどヘンリーのイニシエーションや主体化というトピックに何らかのかたちで言及してきた。

Red Badge という小説を読むさい、ヘンリーの「成長」に対してクレインがいかなる距離のとり方をしていると捉えるかは、重大な問題である。たとえば60年代に書かれたふたつの批評を較べてみれば、アメリカ自然主義文学研究の大家である Donald Pizer は、本作品を“the universal youth”を主人公とした“an antiheroic allegory of 'life'”であるとして、ヘンリー（の成長）に対するクレインの皮肉な視線を読み取っている (24-32)。いっぽう John Fraser は、ベトナム戦争下のアメリカにおいてそうした読み方をするのは、悲惨な戦場における死という体験を自らに差し迫ったリアリティのある問題／恐怖として捉えざるを得ない（若者のまえて講義する）者として倫理的に無責任であるとし、ヘンリーの maturity をまともに受け取ろうとする姿勢をとる

(279-80)。

もちろん、というべきか、多くの批評家たちは程度の差こそあれ前者の立場をとってきた。こうしたクレインの「アイロニー」を新歴史主義的方法にもとづいて実証的に示したのが、たとえば Amy Kaplan の “The Spectacle of War in Crane’s Revision of History” と題された論文である。Kaplan は、南部再建期以後のアメリカにおいて復員軍人の回想録や南北戦争を題材とした小説が氾濫していた事実に触れ、大衆向けのエンターテインメントと化したそれらの言説が、いかに南北戦争の帰結がもたらした社会的矛盾を隠蔽する機能を果たしていたかを概説し、つづいてそれらの欺瞞的な諸言説を、*Red Badge* の冒頭数段落においてクレインは個別的に順番に揶揄しているのだと説得的に示している (77-91)。Kaplan が結論するところによれば、クレインの意図は、南北戦争をさかいに「表象のモード」もまた変化したという事実を暴くことにあった。その「変化」の内実とは、南北戦争以後の戦争はジャーナリズムの発達 (上で述べた「欺瞞的な言説」の一部) などに伴って「見られる」ことをつねに意識させられる場と化したということを指している。つまり銃後の世間というものの視線が兵士に内面化されたのであり、その結果、彼らのあらゆる行動は「スペクタクル」と化し、ゆえに、戦場において達成される主体化は、theatrical で tentative で unstable なものとならざるを得ない、ということになる (95-100)。

Kaplan の議論はおおむね納得のゆくものであると思われるが、しかし、*Red Badge* が南北戦争の歴史性を抑圧するような言説に対するパフォーマンス的な批判であるとしながら、それがヘンリーの主体化の「不十分さ」によってのみなされるのだとすれば、それはいささかクレインのアイロニーを矮小化してしまうことになるだろう。Kaplan の論文の初出は 86 年だが、主体化というものがつねに不十分にしかなされないという認識は、たとえばポスト構造主義のごく基本的な教えのひとつであったはずである。

これはつまり、ヘンリーの「主体化」の「不十分さ」を単なる「不十分さ」にすぎないと捉えてしまうと、それがほかならぬ戦場においてなされたことの意味を取りこぼす危険が生じるということを示しているのではないだろうか。たしかにヘンリーの主体化は不十分であり、そこで確立されたかに見える自我は脆弱で、かつ、クレインもその不十分さと脆弱さに関してアイロニカルな書き方をしてはいる。しかし、ポスト構造主義の時代を経たわれわれは、その「不十分さ」のまえて立ちどまり、それをもうすこしばかりつぶさに観察してみてもいいのではないだろうか。本稿はこのような観点から *Red Badge* というテキストを再検討する作業を通じて、そのアイロニーの複雑さをこれまでとは異なるかたちで再定位すること目的とする。

1. 南北戦争を解釈すること

うえで Kaplan の議論を引き合いに出したのは、主体化の不十分さというその結論に不満を呈することだけが目的だったわけではない。彼女の議論の前半部分が実証的に示

しているのは、同時代における欺瞞的な言説の流行を批判／揶揄するというクレインの意図だったわけだが、それは別の言葉でいえば、南北戦争という過去の歴史的事実をあらためて「解釈」という行為一般に対する問題意識でもあったはずであり、そして、「解釈」行為そのものを「問題化」というモチーフは、小説内において相似的に反復されているように思われるのである。*Red Badge*という小説はじつに解釈行為に満ちているが、そのうちもっとも象徴的なのは、言うまでもなく、タイトルにもなっているヘンリーの頭の傷に対する解釈である。

ヘンリーの傷は、じっさいには敗走する味方の北軍兵士に話し掛けようとした際に銃床で殴られてできた傷であるにすぎないのだが、その傷を戦友であるウィルソンを始めとするキャラクターたちは「銃で撃たれてできた傷」とであると解釈する。ここで、そうした解釈をヘンリー自身が唆したという事実はさほど問題ではない。*Red Badge*における「戦場」は、「傷」を銃で撃たれたものと（恣意的に）解釈するという目的論的なコンテクストが支配的となっている場（“a society” [49]）なのであり、ウィルソンらがヘンリーの証言を「嘘」であることを疑いもしないという状況そのものが問題なのだ。

「戦場」においてあらゆる「傷」は「銃で撃たれた傷」へと自動的・目的論的に解釈され、それはさらに「勇気」のしるしであると見做される（いっぽうで「無傷」は“the letters of guilt” [43]と見做されるかもしれない）。それ以外の解釈の可能性は積極的に忘却される。この小説に“The Red Badge of Courage”というタイトルを冠したクレインのアイロニーは上記のような戦場の短絡に向けられているのだとまずは考えるべきだろう。

こうしたアイロニー、あるいは批判は、「戦争はよくないものであり、怪我や死を「勇敢」として称揚するのは倫理に悖る」というヒューマニズム的な批判として片付けられるものかもしれない（し、そうした批判としての効果を本論は退けるものではない）が、本論の文脈においてより重要なことは、さきに「相似的な反復」と述べたこととかわわっている。すなわち、再建期以後のアメリカにおいて氾濫していた欺瞞的な言説は、南北戦争を「個人の成長の場」として「解釈」することで「美化」していたのであるが、ヘンリーの傷もまた、「勇気」のしるしとして「解釈」されることで「美化」されているのだ。こうしてヘンリーの傷に向けられたクレインのアイロニーは、南北戦争にかんする欺瞞的な言説一般へ向けられたものへと拡大する。

2. 視覚の独立と崇高化

つぎに、うえで「主体化の不十分さ」、あるいは「成長の奇妙さ」と言い換えた現象についての考察に移りたい。ここで目指されるのは、ヘンリーの主体化／成長が、どのような意味で不十分／奇妙であるのかを再検討することで、クレインのアイロニーをより複雑に捉えなおすことである。

クレインを文学史的に解説するさい、自然主義とならんで言及されるトピックのひとつが印象主義である。Fredric Jameson は *The Political Unconscious* のなかでコンラッド——クレインを真正の印象主義者と評した人物——を扱った章において、印象主義の起源、あるいはその成立条件について説明している。いわく、“positivism as ideological production” と “impressionism as aesthetic production” とは、ともに “rationalization and reification in late nineteenth-century capitalism” (225) の帰結であると第一に理解されなければならない。資本主義が社会的統一性を破壊し、その結果として社会が断片化（物象化）されたというマルクス主義的な見取り図は、人間の精神や知覚に対しても似たような効果を及ぼすというのだ。すなわち、いっぼうで精神は合理化され「計量」的な志向を強め（実証主義）、たほうでは、従来は統一的であった（渾然一体としていた、と言ったほうがわかりやすいかもしれない）人間の諸知覚（視覚・聴覚など）を、それぞれ独立したものへと分断する。知覚の分断がなぜ印象主義に帰結するのかといえば、それは分断され自律化したひとつの知覚、たとえば視覚が、自律の結果としてそれ独自の論理に従って計量を開始し、超先鋭化するためである。この結果としてたとえば「自然の風景を眺める」という行為に特別の意味が付加され、風景画のようなジャンルが可能となり、あるいは「純粋な色」への志向がうまれる。この最も典型的かつ先鋭的な例が印象主義なのであり、このスタイルは “discards even the operative fiction of some interest in the constituted objects of the natural world, and offers the exercise of perception and the perceptual recombination of sense data as an end in itself” (229-30) とされる。

さて、*Red Badge* において「視覚」が特権的な地位を占めているらしいということは、一読して明らかであろう²。とりわけヘンリーには、折島正司が「ただ見ているという病気」（222）と表現する、見ることへの強迫的な執着があるように思われる。ヘンリーの視覚はしばしば、Jameson が説明したような印象主義的プロセスをそのまま辿ってみせる——つまり、戦場を注視するうちに視覚が独立して、ほとんど暴走するように視覚のみが超先鋭化するような現象である。それはたとえば以下のような描写にあきらかである。

It seemed to the youth that he saw everything. Each blade of the green grass was bold and clear. He thought that he was aware of every change in the thin, transparent vapor that floated idly in sheets. The brown or gray trunks of the trees showed each roughness of their surfaces. And the men of the regiment, with their starting eyes and sweating faces, running madly, or falling, as if thrown headlong, to queer, headed-up corpses—all were comprehended. His mind took a mechanical but firm impression, so that afterward everything was pictured and explained to him, save why he himself was there. (82)

なにかに「注意」する、という行為そのものが、知覚の自律化をまって初めて可能となったことを示した Jonathan Crary の *Suspensions of Perception* によれば、“[a]ttention always contained within itself the conditions for its own disintegration, it was haunted by the possibility of its own excess” であり、また “the border that separated a socially useful attentiveness and a dangerously absorbed or diverted attention was profoundly nebulous” であって、そのようなことは “we all know so well whenever we try to look at or listen to any one thing for too long” (46-47) というように誰もが経験しているという。上記引用箇所でもヘンリーの視覚に生じているのは、まさにこの注意の過剰ということであると言えるだろう。

Crary がたとえば「トランス」とよぶこの過剰な、超先鋭化の状態を、「崇高」の体験である、とここで言い換えてみたい。崇高とは表象不可能性の体験であるとはバーク／カント以降の定説であるが、ふたたび Fredric Jameson によれば、モダニズムの美学は崇高を抑圧する (Jameson, “Modernism and Imperialism”)。このテーゼの意味を Slavoj Žižek の *The Sublime Object of Ideology* における崇高に関する記述を援用しながら以下で説明してみよう。

いささか単純化して述べれば、まず平静な心意識によって「観照」される場所の「美」と、観照の限界を超えた圧倒的な力や無限性によって喚起される場所の「崇高」という区別がある。崇高は美の崩壊の感覚である、という関係性において、美は崇高に論理的に先だち、崇高な対象は、“in the very field of representation, provides a view, in a negative way, of the dimension of what is unrepresentable” (Žižek 203) ということになる。つまりその表象不可能な対象（物自体）は、表象不可能であるというまさにその形式において否定的に（のみ）把握されうるのである。

さて、Jameson はこうした崇高をモダニズムの美学は抑圧する、と述べたのだった。マルクス主義者である Jameson にとって、観照的、つまりカント的な心的態度は、中産階級的なものである。中山徹による整理を借りれば、資本主義における中産階級的な主体は、「資本主義の現れ、現象としての資本主義しか見ていない」のであり、「このとき歴史としての資本主義は、知覚された現実の彼方に、物自体として置かれている」。つまり「歴史としての資本主義」＝「物自体」の存在を隠蔽することによって「資本主義」は生きながらえる。そして Jameson によれば、このジレンマを解決できる唯一の主体は、むろん、プロレタリアートである。自らが「労働力」としての商品であるところのプロレタリアートは「対象世界のメタレベルに立てない」がゆえに、対象との「距離」をその条件とする「観照」は不可能である (中山 7-8)。

であるとすれば、*Red Badge* においてヘンリーの視覚が崇高化しているのは、ここで Jameson の言う「プロレタリアート」の位置から戦争を知覚しているためだと考えられるだろう。自らが「兵力」としての商品であるところの「兵卒」 private soldier は、

戦争のメタレベルに立てないというわけだ。そして兵卒＝プロレタリアートの崇高が廃棄するところの美的・観照的態度を代表するもの、それは上官のヴィジョンである。ヘンリーがウィルソンとともに盗み聞く上官同士の会話を引用してみよう。

“What troops can you spare?”

... “Well . . . I had to order in th’ 12th to help th’ 76th, an’ I haven’t really got any. But there’s th’ 304th. They fight like a lot ‘a mule drivers. I can spare them best of any.”

The youth and his friend exchanged glances of astonishment. (79)

各部隊を番号でしか把握していないことから明らかなように、上官の会話は、個々の兵卒の戦闘や生死といった次元のメタレベルに立って交わされている。ヘンリーやウィルソンといった最下級の兵士は、そのようなヴィジョンに驚きを隠せない。それは彼らの想像の範疇を超えているのだ。が、そうであるがゆえに彼らは上官の観照的態度に亀裂を生じさせ得る崇高な主体となり得る唯一の存在なのである。そしてプロレタリアートの崇高がブルジョワジーの観照的欺瞞を暴くとき、同時に資本主義の隠蔽されていた矛盾が暴かれるのであれば、*Red Badge*の兵卒が抉りだす矛盾とは、戦争のそれであるだろう。

次節においてわれわれは兵士の崇高というアイデアを引き続き展開しながら、ヘンリーの主体化の「奇妙さ」の問題を再検討することを通じて、クレインのアイロニーをまた別の観点からさらに詳しく記述しなおすことを目指す。

3. hero, man, member

ヘンリーは **hero** になることを夢見て戦地へ赴いたのであるからして、兵士をモノのごとく見做す上官の会話に彼が憤慨することはただちに納得がゆく。しかし、彼はそもそもこの憤慨と矛盾するような願望を抱いてもいたことに注意せねばならない。それは「周囲と同じように振る舞えるか」という不安、軍隊の “wholeness” (14) への無事な参入という願望である。これはあるいは「埋没」と表現したほうが適切かも知れないような願望であり、“separated” (14) あるいは “a mental outcast” (16) という精神的孤立感への不安から生じたものである。これをクレインは “a little piece of the army” (36) と例えば表現しているのだが、以下の引用はとりわけ注目に値する。

He suddenly lost concern for himself, and forgot to look at a menacing fate. He became not a man but a member. He felt that something of which he was a part—a regiment, an army, a cause, or a country—was in crisis. He was welded into a common personality which was dominated

by a single desire. (27)

自己に対する関心が脱落し、個人にふりかかる「危険」が取るに足らぬものとなり、その結果あるいは／かつ原因として何らかの集合的単位へと「埋没」という感覚があり、その状態を“a man”と対置させて“a member”と呼んでいることに注目したい。ここに、heroとmanに加えてmemberという第三の主体モデルを考慮に入れる必要性が立ち現れ、heroを諦めてmanへという単純なプロット整理は修正を余儀なくされることになる。

このmember化の臨界点においてこそ、うえで述べた崇高体験が生じることは、もはや想像がつくかもしれない。以下の引用箇所は、先に引用した、視覚が過剰に先鋭化する箇所の直後にくる記述である。

It was a temporary but sublime absence of selfishness. And because it was of this order was the reason, perhaps, why the youth wondered, afterward, what reasons he could have had for being there. (82)

この没我にともなう崇高体験は、彼がmanからmemberへ滑り落ちていることを意味する。であるからこそ、その数行後において、意識を取り戻した兵士たちに関して“*They were become men again*”と書かれているのである。

これとラストシーンにおけるヘンリーを対置することで、さらに対照を際立たせることができるだろう。彼はそこで“*He felt a quiet manhood . . . He had been to touch the great death, and found that, after all, it was but the great death. He was a man*” (103) と感じ、同時に自らを“*an existence of soft and eternal peace*”と捉え、びしょ濡れになりながら列をなして行軍する兵卒たちを眺めて“*He had rid himself of the red sickness of battle*” (104) と考えている。すなわちラストシーンのヘンリーは、軍隊へのmember的埋没から逃れ、「メタレベル」を獲得した、美的かつ観照的なmanとしてのヘンリーである。

ではこの美的・観照的態度は*Red Badge*においてネガティブな、唾棄すべきものなのだろうか。ある意味ではその通りである。なぜなら、みずからの昇格の噂を耳にして狂喜している彼は、すでに上官の論理を内面化し始めていると考えられるからだ。この時の彼はだから、先に引用した上官の会話にもおそらくは憤慨することがないだろう。

だが、ここでひとつの問題が生じる。それはいま「ある意味ではネガティブ」と留保をつけたことと関連している。この問題は、manのネガティブさそのものではなく、逆に、それと対置されるところのポジティブな主体のありかたにはmemberという選択肢しかない、ということを考えてみると明確になるはずだ。すなわち、自らの命よりも集団の利益を優先するようなmemberがポジティブな主体と見做されるとは、いったいどういった論理なのか。われわれはそこに一種の倒錯を見なければならぬ。

そもそもマルクス主義者がプロレタリアートという主体に可能性を見出すのは、プロレタリアートという状態そのものが喜ばしいものであるからでは決してなく、それが資本主義の矛盾を暴きうる唯一の主体的位置を占めているからであるにすぎない。その倒錯は資本主義という状況のせいなのだ。であるならば、**member**にしかポジティブな可能性を見出せないという事態も、*Red Badge*というテキスト内の倒錯した状況が背景となって生じているはずである。プロレタリアートだけがその矛盾を指差しうるはずの「歴史としての資本主義」という怪物——*Red Badge*においてその位置を占めるシステム、それは戦争である。

4. 自然主義の、あるいは戦争の不自然な論理

いくぶん問題点を整理しておこう。ここまでで明らかとなったのは、プロレタリアート：**ブルジョワ**=崇高：**美**= **member**：**man**という各二元論の照応関係であった。つぎに、プロレタリアート/**member**という、それ自体が喜ばしいわけではないはずの主体にしかポジティブな存在論的価値を見いだせないという、資本主義/戦争に批判を差し向けるさいに露呈される倒錯を指摘した。だがあわせて、さらなる厄介な問題を考察する必要がある。すなわち、**member**化したヘンリーは戦場において目立って活躍することで、ほとんど**hero**化を達成してしまっているように見えるという逆説的な事態もいっぼうで生じており、またそれと同時に、戦場においては、**member**的な没我状態、つまり個人の危険を顧みないような心的状態こそが兵士として優秀であると判断される主体のあり方なのであって、それは「軍隊」という集合的単位にとっては好都合——いわば自ら進んで搾取されてくれるプロレタリアートのようなもの——であることを思えば、戦争を美化する欺瞞的言説に対するアイロニカルな効果はいったいどうなってしまうのかという疑問が出来せざるを得ないのだ。すべてを自らの活力に変換するかに見えるこの論理の正体を、以下で突き止めてみたい。

上記の問題を考察するにあたって、まずは新歴史主義批評の最良の成果のひとつであり、かつ自然主義文学の見取り図を一変した Walter Benn Michaels による *The Gold Standard and the Logic of Naturalism* 所収の、“Corporate Fiction” と題されたフランク・ノリス (Frank Norris) の『オクトパス』(*The Octopus*) を論じた章を参照しておきたい。Michaels のテーゼは、自然主義文学において **natural** な **person** が描かれることはないという逆説である。ここで **natural** という言い回しには、**moral** あるいは **biological** な判断に基づいた **mechanical** な行為を遂行する主体という意味合いが込められているのだが、自然主義文学の論理下においてそのような基準は無効となる。そこではあらゆる現象が一元的な **force** の現れによってのみ説明されるため、**person** とその集合体である **corporation** という通常であれば異なる審級に属していると思われるはずの二種類の主体は一元化され、同質の **entity** であると思われる。そこでは **corporation** があたかも **person** のごとく機能するのではなく、事態は正反対で、

corporation 的なものこそが person であると見做されるのだ (204-13)。

この一元化が Michaels も言うように「不自然」であるのは、natural な person の集合体として出現した corporation がしたがう論理が unnatural なものだからである。どうということか。

Natural objects—moral agents or molecules—may or may not have their purposes, but nature itself, embodied not precisely in either the molecules or the moral agents but in the abstract principle of “statistical fecundity,” has a purposiveness of its own, “a purposiveness whose precise outcomes no finite being seems precisely to intend.” It is thus the discrepancy between the behavior of individuals and that of aggregates that constitutes the personhood of nature, and the indifference of statistical laws to the question of whether *anything* really is a person turns out to be nature’s way of guaranteeing that ultimately *everything* will be a person³. (211)

ここで記述されているのは、自然主義文学に関してよく言われるような個人の無力さというようなことだけではない。すなわち、そもそも natural であるはずの individuals が集まって aggregate となったときに不可避免的に abstract な——つまり unnatural な——論理が生じてしまい、しかも、こんどは逆にその statistical law に則って person というものが定義されるようになってしまうという倒錯、ここにこそ Michaels は自然主義の不自然さを見ているのである。

上記の枠組みを念頭に *Red Badge* に戻り、問題の整理を試みよう。まず corporation の位置に army を置換することができる。Army の論理は個々の兵士の natural な論理を無視して構築される unnatural なものである。これを上官の「メタレベル」のヴィジョンが代弁する。この視点からこんどは個々の兵士は army の論理にしたがう member として捉え返される。これは army の論理にとっては好都合(“natural”)な主体であり、むしろ、その論理の外部から見れば unnatural な主体である。つまり Michaels が摘出した自然主義の論理は *Red Badge* における戦争の論理と全く同じものである。ここに自然主義と資本主義と戦争、それぞれの論理のおぞましい親和性が浮かび上がる。

このことを確認したうえで、ヘンリーが森でリスに松ぼっくりを投げて実験する印象的な場面を読み直してみよう。この場面は戦場からの逃走の直後に位置しており、戦争から逃げ出した先が「自然」であるという点において、ここで見ておく必要がある。反射的に逃げ出すリスを観察して、彼は以下のように考える。

The youth felt triumphant at this exhibition. There was the law, he said.

Nature had given him a sign. The squirrel, immediately upon recognizing danger, had taken to his legs without ado. The youth wended, feeling that Nature was of his mind. She reinforced his argument with proofs that lived where the sun shone. (37-38)

ここで Nature の law に則っていると考えられている行為は、Michaels によれば自然主義文学が描かないところの、moral ないしは biological な mechanics に則った individual の行為である。ここでは明らかに戦場の不自然——危険なのに逃げない——ということが Nature の論理と対置されている。つまり、ヘンリーもまた戦場の論理を、「自然／不自然」という対比のもとに眺めているのである。Red Badge には戦争の論理の「外部」が描き込まれているのだ。

また、army という集合体と個々の兵士たちが、ともに同様に機械のイメージと生物のイメージの両方で繰り返し表象されているという点もあわせて注目しておきたい。このことは、自然主義の論理は (1) body と machine の区分を廃棄するだけでなく、すすんで (2) body/machine と soul の区分をも廃棄するという Michaels の主張 (201) と重なっている。すなわち、(1) 機械と生物とは有機体という次元において同等のものとして扱われ、(2) army もまた兵士と同程度に soul を持つ、あるいは兵士も army と同程度に soul を持たないものとして扱われる。

さらに、先にも触れた、兵士の個別的な生死を無視し、交換可能な道具として見做すような上官の発言の意味もこの文脈から再解釈することができる。まずヘンリーは上官のヴィジョンが unnatural であることに対して憤っているのだが、彼はその論理に対して「復讐」することを次のように夢想する——“It was clear to him that his final and absolute revenge was to be achieved by his dead body lying, torn and glittering, upon the field” (96)。自然主義の論理は natural な body と statistical な aggregate とを区別しないという unnatural なものであった。ゆえに、いち兵士の身体がばらばらになるという事態——英語でこれは *dismemberment*⁴ と表現される——は unnatural な論理下にあっては army を解体することと同等の効果を持ちうるものであり、ひいては自然主義の論理の不自然さを暴く契機となりうるのである。つまり彼の発想は、自然主義／戦争の不自然な論理にあえて則りつつ、内側からその自壊を画策することによって復讐＝批判になるはずだ、というものとして解釈することができるのだ。

5. 抑圧の回帰としてのアイロニー

上述した Michaels の議論をいわばマルクス主義的に読みかえることで、Postmodernism の Jameson は corporation という集合的主体の出現を歓迎する。なぜなら、Michaels の記述する自然主義的主体である corporation は market という資本主義の論理にしたがわないからである (Michaels 209; Jameson 216-17)。それは

資本主義や market の輪郭を明確に描き出すわけではないし、それらをただちに廃棄するわけではないにせよ、corporation が出現しなければ生じ得なかったような綻びを market に生じさせ、資本主義の僭称する「全体性」を否定する契機をわれわれに与えるのである。

だがしかし、market の全体性に亀裂を生じさせる主体として歓迎されるのが corporation であるという、やはり倒錯した——つまり否定的肯定としての——結論をわれわれはどう受け止めたいのだろうか。このような困惑が生じざるをえないのは、本稿がこの図式の corporation の位置に army を置換してきたためでもある。Michaels の記述する自然主義の論理においては、individual は救われることがない。これは一般的な自然主義文学のイメージと合致する。それは『オクトパス』という自然主義小説の分析においては適切な「結論」だったろうし⁵、マルクス主義的には歓迎すべき事態と見做し得るかもしれないのだが、Red Badge という小説のアイロニカルな側面を考察してきたわれわれは、Jameson のマルクス主義的な読み替えをもういちど小説的に読み替える可能性を考えてみる必要があるのではないだろうか。というのも、例えば戦場から逃走したヘンリーの逃げこむ先が Nature であり、そこで彼は戦争の論理の不自然さをまさに自然／不自然という二分法のもとに触知していたという事態をわれわれは見てきたからである。これを本稿は Red Badge には戦争の論理の「外部」が描き込まれていると表現したのだが、その「外部」を見出すヘンリーが自然主義＝戦争の不自然な論理に生じさせる亀裂は、corporation が market の論理に生じさせる矛盾よりも、もっと明確に攪乱的なものなのではないか。

戦争の論理も市場の論理も、各個体がシステムの機能に対して最適化されたふるまいを選択すると仮定している。こういった主体を Jameson は “the individual characters of laissez-faire” (*Postmodernism* 215) と表現し、また三浦玲一によれば、市場の原理は「みずからの利益の最大化を追求する」理想的主体を仮定してはじめて成立するのであって、「社会の利益を考え、もしくは、貧しい人々のことを考え、みずからの個人的な利益に反して行動した場合、市場原理は崩壊することになる」と述べている (375)。これらを本論の文脈から言い換えれば、戦争の論理も市場の論理もともに、individual の natural さというものを抑圧したうえにのみ仮構されるにすぎないということになる。それは具体的にはたとえば、戦争においてすべての個人が natural に行動する——すなわち全員が戦争を忌避して勝手に家に帰ってしまったら戦争は成り立たない——可能性に対する想像力を抑圧するということを指している。

Postmodernism において、Jameson は本稿でもすでに引用した Michaels が記述する自然主義のふたつの脱構築を引用して結論を導いている。すなわち、自然主義の論理は (1) body と machine の区別を廃棄するだけでなく、(2) body/machine と soul の区別をも廃棄するという箇所である。これらが自然主義の不自然を形成するのであり、本稿はこれと戦争の論理との間にパラレリズムを見てきた。であるならばいま、このふたつの不自然な脱構築を、ふたつの抑圧であると捉えかえしても良いのではないだろう

か。つまり、bodyとmachineの脱構築とは肉体性の抑圧を意味し、body/machineとsoulの脱構築とは個人の目的意識purposivenessの抑圧を意味する。これらはindividualのnaturalさを構成するのであるからして、自然主義と戦争とは人間の自然性を——というよりもはや「人間」そのものを抑圧するのだと言ってもよいだろう。そして*Red Badge*という小説は、バラバラになった身体という発想と、戦争の外部にあるNatureとそこにおけるindividualの目的意識というふたつの「自然」を書き込み、それらを回帰させた——そのような意味においてこれはすぐれてアイロニカルかつ自己批評的な自然主義小説＝戦争小説であると、われわれは結論してよいだろう。

注

¹ *Red Badge*の歴史性を問題にしたごく最近の論文として、新田啓子「恥辱の亡霊——スティーヴン・クレインの戦争小説」(2014)を挙げるができる。新田はヘンリーの「恥」の意識に着目し、そこに北軍側の加害者意識を読み取る。その指摘自体は示唆的であるように思われるが、*Red Badge*全体を「兵士が恥をかく」というプロットで整理するという立場は、この小説の後半部分を捨象していることになるだろう。そのような意味でも本論は「成長」という点にこだわりたい。

² とりわけ、すでに引用したKaplanにつづいて年代順に、上方を見上げる身体（その多くは死体）の視線と「書くこと」というテーマを結びつけて論じたMichael Friedの*Realism, Writing, Disfiguration: On Thomas Eakins and Stephen Crane*や、*Red Badge*論の部分に関してはFriedの議論に多くを負っているMark Seltzerの*Bodies and Machines*の第三部、さらに折島正司の『機械の停止』第三部を参照されたい。いずれも*Red Badge*にかぎらずクレインの「見ること」へのオブセッションを広く扱っている。

³ このブロック引用内において引用符で括られている箇所はJosiah Royce, “The Mechanical, the Historical, and the Statistical”からの引用である。

⁴ そもそもmemberのラテン語源membrumはlimbという意味であり、集合体の構成員という現在では一般的となったmemberの意味は、身体の一部という語義から派生したものである。

⁵ ただし、『オクトパス』にも自然主義の論理の外部への志向は——やはり否定的な形ではあるが——描きこまれている。拙論（阿部「自然主義の臨界とユートピア」）参照。

引用文献

Crane, Stephen. *The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer and Eric Carl Link. 4th ed. New York: Norton, 2008. Print.

Crary, Jonathan. *Suspensions of Perception: Attention, Spectacle, and Modern Culture*. Cambridge: MIT P, 1999. Print.

Fraser, John. “Crime and Forgiveness: *The Red Badge* in Time of War.” Crane 278-91.

- Print.
- Fried, Michael. *Realism, Writing, Disfiguration: On Thomas Eakins and Stephen Crane*. Chicago: U of Chicago P, 1987. Print.
- Jameson, Fredric. "Modernism and Imperialism." *Modernism, Colonialism, and Literature*. Terry Eagleton, Fredric Jameson and Edward W. Said. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990. 43-66. Print.
- . *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. New York: Cornell UP, 1981. Print.
- . *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. London: Verso, 1991. Print.
- Kaplan, Amy. "The Spectacle of War in Crane's Revision of History." *New Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Lee Clark Mitchell. Cambridge: Cambridge UP, 1986. 77-108. Print.
- Michaels, Walter Benn. *The Gold Standard and the Logic of Naturalism*. Berkeley: U of California P, 1987. Print.
- Pizer, Donald. *Realism and Naturalism in Nineteenth-Century American Novel*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1966. Print.
- Seltzer, Mark. *Bodies and Machines*. New York: Routledge, 1992. Print.
- Žižek, Slavoj. *The Sublime Object of Ideology*. 2nd ed. London: Verso, 2009. Print.
- 阿部幸大「自然主義の臨界とユートピア——フランク・ノリス『オクトパス』論」『ストラータ』第28号(2015)、18-27頁。Print.
- 折島正司『機械の停止——アメリカ自然主義小説の運動／時間／知覚』松柏社、2000年。Print.
- 中山徹「モダニズムの崇高な対象——『ユリシーズ』における昇華、「モダニズムと帝国主義」の可能性」『文学研究のマニフェスト——ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』三浦玲一編、研究社、2012年。1-24頁。Print.
- 新田啓子「恥辱の亡霊——スティーヴン・クレインの戦争小説」『抵抗することば——暴力と文学的想像力』藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編、南雲堂、2014年。57-75頁。Print.
- 三浦玲一「アメリカン・ロマンスからポストモダン・ロマンスへ——ティム・オブライエンの『かれらが運んだもの』」『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』平石貴樹・後藤和彦・諏訪部浩一編、松柏社、2013年。355-84頁。Print.